

接辞の陥穽

——日本語雑記・八——

超ドデカポスター

小田急の電車内でみた、雑誌の吊り広告のメモがある。「画刊ヤクダキクムヤ一特画付録 画マシヤホメター三」(2006.12.23)。「このコピー」の考案者は、「でかい」を「大きい」の俗語としてしか考えていなかったのではないかと、思っ
てメモしたものである。

俗語という評価は、語頭の「で」によるに違いない。その「でかい」は、形容詞「いかい(厳・大)」に、強意の接辞「ど」がついた「どいかい」の縮約形である。「ど」が転じた「で」の強意の意識が薄れ、さらに「ど」を被せたのが「どでかい」である。かくて「超どでかい」は三重

工藤力男

の強意表現ということになる。

「中」という語の強意表現は「真ん中」、それをさらに強めた「真ん真ん中／ど真ん中」は耳にするが、「超真ん真ん中／超ど真ん中」にはまだ接していない。「真」「ど」は明らかに強意を担うとわかるので、かかる接辞を三つ重ねることはためらわれるのだろう。

野村雅昭「近代日本語と字音接辞の造語力」(岩波書店『文学』49-10 1981)は、接頭辞「無・不・未・非」、接尾辞「的・性・化」が、近代の日本語史に現われて定着する過程をたどった、興味ぶかい論文である。本稿はその野村論文を手がかりにして、字音接辞「性」「論」がついた三

語に着目して実態を見つめ、接辞の魅力について考えるものである。

人名は不明記を原則とし、必要に応じてローマ字一つでかえる。留意すべき箇所は傍線をつけたり、改行を斜線にかえたりすることがある。紀年はキリスト暦により、出典の巻号、ページとも、括弧内に横書きする。「日本国語大辞典」第二版は「日国大」と略称する。ラジオは日本放送協会、新聞は原則として東京本社版朝日新聞の朝刊である。

方法論

観念論・唯物論など哲学理論の立場をさす「論」、人生論・友情論などそれについて何かをのべる意味の「論」、山論・水論など何かの利益を争う意味の「論」など、探しはじめると、さまざまな「論」のあることに気づかされる。そして「方法論」である。

この語は、methodologyの訳語として早く日本語に定着したらしく、『哲學字彙』(1881)に既にのっている。小学館『大辞泉』(2005)には、「学問の研究方法そのものを論理的に考察し、真理を得るための妥当な方法を探究する分野」とある。哲学、なかんづく論理学の術語として厳密に

使用すべき語なのだが、現実には必ずしもそうではない。語の性質上、専門書や学会誌にみることが多い。そうした実例を少しみよう。

日本語文法学会の、対談形式による学会展望の記録『日本語文法』6-1(2006)にはこれが頻出する。まず「記述・教育文法」分野から。

M 一般言語学に学びながら、文法を包括的・体系的に記述する方法論に関する議論をもっと深めていく必要があると思います。

A 記述文法は目的や方法論を意識しにくい研究ジャンルかもしれませんが、それだけに、壁を作って閉じこもってはいけないということですね。さまざまな理論や方法論にオープンであり続けることが、ひいては記述文法の対象となる言語事象の拡大にもつながってくるのだと思います。(pp.154-155)

右のAの発言はMの発言を受けて直ちになされたものである。ここではともに「方法論」によっているが、Aの発言では「理論」との関係が曖昧な、この「方法論」が頻出する。一方のMは「傾向性」を多用する。

次に「歴史的研究」分野でKの論文を話題にした箇所をみる。

N その立場と方法を明確に打ち出しているもので、今後の研究上のモデルともいえるでしょう。

O 上記のK氏の論文で示された方法論の一端が実践されたものです。(p175)

Nはこの分野のコーディネーターのだが、「方法」と「方法論」の違いについては、遂にふれずにおわっている。この三人にとって、「方法」と「方法論」はいかなる関係にあるのだろうか。

同じ疑問は日本語学会の書評(『日本語の研究』(2010))についてもいえる。

そのための方法論として、方言意識の面での「方言認知地図」を用いた方法、また言語使用面での自然談話資料を用いた分析は、いずれもこれまでの社会方言学的研究では少なかつたものである。(p99)

接辞「論」がついてはいるが、方言認知地図を用いた研究、自然談話資料を用いた研究、つまり、二つの研究方法にすぎないのではないか。

もう一篇、大修館書店『言語』(38-12 2009)から。

「語用論の来し方とそのゆくえ」と題するエッセイの一節「二つの語用論」一千字ほどの記述である。言語学の概説書には、音韻論・形態論・統語論・意味論・語用論のように配列されていることが多く、大陸ヨーロッパでは「方法論」としての語用論」という見方が主流であるとして自説を展開した箇所からひく。

音韻論や形態論でも種々の方法論や枠組みがそれぞれ先鋭化し、専門化が進んでいるが、

語用論の場合、みずから信頼する方法論と関心を持つテーマや現象を軸に開拓していくことが多く、

方法論としての語用論は、それぞれの枠組みの継承と修正と対立のなかで発展していくもので、

個々の方法論は語用論の枠を越えて広がっていく可能性が高く、

そもそも「方法論」と「枠組み」は並べて論ずべきことなのだろうか。かくて、わたしには語用論と方法論の関係が捉えられなかった。

右の諸例を含むほとんどの「方法論」は、「方法」ですむのに、「論」をそえて権威づけしたにすぎないようにみえる。

関係性

初めに書評と論文によって「関係性」の実態をみる。

まず、瀬戸口明久著『害虫の誕生』を対象にした高村薫さんの書評（新聞 2009.9.20）は、標題が「近代化と戦争が関係性を変えた」と大きく横書きされている。もともと自然界にいきていたウンカやバッタたちはいつ「害虫」になったか。高村さんはそう書きおこし、十九世紀末の細菌学の発達でハエが駆除すべき虫になったとする著者の見解を紹介する。そして、熱帯医学の発達にふれ、「日本でも台湾でマラリア研究が進んだ。そして戦争が、さらに虫と人間の関係を変えてゆく。」とかれている。書評の標題はこの記述に関わるもので、編集部がつけたのだ、とわたしはいらんでいる。

白井伊津子著『古代和歌における修辞』の書評（萬葉学会『萬葉』197 2007）がある。

第一章「枕詞・被枕詞の関係分類の試み」において枕詞・被枕詞の関係性の分析を中心にその関係性の論理的体系化を図り、第二章ではその展開上にある人麻呂の枕詞・被枕詞の関係性の中に語の広がりを見、

(p.44)

右のようにこの書評には「関係性」がたいそう多い。著者の白井さんは他の箇所でも一貫して「関係」としか書いていない。著者の用語「関係」と、評者の用語「関係性」とのあいだにどんな関係があるのか、わたしは読みとれなかった。

近代文学における〈母〉の変容を、ポップカルチャーと関わらせて論じた論文がある（『岐阜大学国語国文学』201998）。

これまで近現代文学のなかでの母―子、特に娘の関係性については、たとえば宮本百合子や津島佑子の諸作品にみられるように、母への執着とともにそれと背中合わせの反発と闘争というアンビバレントな関係性が濃厚に認められたのであるが、(p.35)

引用の多いこの中篇論文は「関係性」を十八回用いるが、遂に「関係」はみえず、「情緒性」「問題性」「方向性」もある。やたらに「―性」のつく語を用いた文章は、わたしにはおおむね難解である。

次に掲げるのもそのたぐいで、同じ文脈なのに、「性」の着脱が頻繁である。日本語学会機関誌『日本語の研究』

の最新号(7-2 2011)から。原文は横組みの論文である。

構成要素間の関係性(p.1 2 13)

構成要素間の関係(p.1 2)

ほかに「2つの性質の関係性」(p.2)、「ヲ格やデ格とこつた関係性」(p.5)、「有機的な関係性」(p.13)もある。掲載ページの数字からわかるように、これは巻頭論文である。

次に掲げるのは、被差別部落出身の父をもつ女性の短いエッセイの一部である(阿吽社『ハッペル』209 2010)。

一八世紀初頭に始まった地域社会の変容が二一世紀に示唆するものは、人と人との関係性と関係性の集合体である社会を豊かなものとしていく戦略の必要性ではないかと思う。(p.14)

一般に、接辞はある既成の語に臨時につくものなので、それがついた語は辞書に搭載されない。『広辞苑』第四版による『逆引き広辞苑』で二字以上の漢字語に「性」の下接したものは百二十ほどあるが、「関係性」はない。「関係」に接辞「性」をつけることで書き手がどんな意味を負わせようとしたのか、読み手はそのつど考えなくてはならない。だが、わたしはその試みにいつも失敗する。

「企業と消費者との関係性」という企業広告、友人づき

あいを「関係性」としたエッセイもある。そのうち、「男
女関係性のもつれによる殺人」などの報道に接する日がく
るに違いない。

方向性

ちょっと堅い文章にはこの語が大流行である。しばらく
大修館書店の『言語』誌からひく。

初めは米国のオバマ大統領のレトリックについて論じた
文章。

理想と真実を恐れることなく語ることによって、人々
の思考の方向性を転換し、新鮮さをアピールしたいと
いう期待が託されている。(['言語』38-3 p.73
2009)

「思考の方向性を転換し」は二ページあとにも出ている。
異なる二論者から一つずつ。

中国社会との強調の必要性とミャオ語世界の維持とい
う相反する二つの方向性を満足させるための策にちが
いない。(['言語』38-12 p.114 2009)

この記事では二回にわたって、その研究活動の価値と
意義を高め広げるために、これからの記述的研究が取

るべき方向性を探りたいと思う。(『言語』38-7 p.66
2009)

余りにもたくさんの用例がみつかるので、不安になって『日国大』を開くと、この語を掲げて「進むべき方向や目標をもっている状態」と記述し、安部公房『他人の顔』(1964)から「表情筋には、それぞれ、一定の方向性があり、その方向にそって伸び縮みする」をひいている。「方向」と「方向性」が一文に共起しており、「方向」だけでいいようにも思う。このころ、すなわち半世紀前から使われだしたのだろうか。

当然、「性」が有効だと感ずることもある。『日本語学研究事典』の「複合語」の項に、

派生語と複合語とは同じく合成語に属するものの、①語構成要素の種類、②語の形成における方向性、の点で異なる。(p.166中段)

とある記述がその例である。

星 泉さんの、チベット語に関するフィールドノートの記述もそうである(『言語』38-12 2009)。ラサ方言の完了の助動詞には、動詞「行く」に由来する *gn* と、「得る」や「生じる」の意味の動詞からきた *cm* とがある。

この二語には、

もともとの動詞の意味のもつ方向性が生きており、「忘れる」とか「出ていく」、「死ぬ」といった何か^が失われる方向性をもった意味の動詞との組み合わせでは *gn* が用いられ、「もらった」、「教わった」、「殴られた」、のような何かを受けるという方向性を持った動詞との組み合わせでは *cm* が用いられます。(p.88)

右の「方向性」を「方向」にかえることは不都合なようにも思う。すると、「方向性」が用いられる以前、すなわち前世紀中ごろまで、かかる事態はなんと表現していたのだろうか、極めてみたい問題である。

世上には首を傾げたい用例が多すぎる。

就任1年目のマーティー・ブラウン監督(47)が最下位に沈み、球団内などでさい配を疑問視する声^が噴出。29日の今季最終戦後に解任か続投かの方向性が決まるが、「ヤフーニュース」デイリースポーツ配信

2010.10.21)

これは、「解任か否かが決まるが」ですむところである。次の新聞記事はどうだろう。

小沢氏は25日の記者会見で「土地を買うという方向性

を決め、後援会にお金が十分ないということでも自分の資金を提供したところまでが自分自身の考え、行動の範疇」とし、個人名義で銀行融資を受けて陸山会に転資した理由については「関与してないのでわからない」としている。(2009.1.31)

直接話法らしい記述が小沢さんの談話どおりなら、ずいぶん体裁ぶつたものだと思うが、この人なら使いかねない表現である。これは土地をかう「方針」にすぎず、むしろ「買うこと」に決め」でよかったのだ。昨秋のプロ野球、中日・巨人のクライマックスステージ第二戦(2010.10.21)では、テレビの実況放送に「打球の方向性」という解説があった。

かかる風潮のなかで、たまに「性」のない「方向」にあって、ほっとする。米本昌平さんは、朝日新聞「私の視点」欄で「調査捕鯨」に関して「マグロなどの水産資源はグローバルな次元で管理強化の方向にある。」とかいている(2009.12.13)。木田元『一日一文』(岩波書店 2004)の五月一日条に、メルロ＝ポンティは「全体論的神経生理学やゲシュタルト心理学のもつ哲学的意味を究明し、人間存在の研究に新たに方向を切り拓いた。」とある。

ウェブサイト『あらたにす』の「新聞案内人」欄に、森信茂樹さんの「改革方針決定がニュースにならない現実」と題する論評がある。そこには、「政府の規模を大きくする方向で議論を開始する」など、「方向」が三回みえる(2010.12.17)。これだけの不足もない。

中村明『日本語語感の辞典』(岩波書店 2010)の「方向」の項に左記の記述がある。

「考えている―は悪くない」のように、抽象的な意味にも使う。

中村さんはわたしと同世代の人である。わたしは「方向性」に頼らずに文章がかきたい。

接辞の陥穽

初めの節にひいた野村論文の冒頭で、高田宏著『言葉の海へ』に言及している。大槻文彦伝であるその著作で、高田さんは「的」という語を一度も使わなかったということで話題を呼んだのだという。そして野村論文は、蛇足をつけくわえるとして、「この文章は、筆者自身のことばとしては、「的」をふくめて、ここで問題とした接辞をつかわずにかいてみた。」でおわっている。

野村さんの論述の中には、外来語の流入にヒステリックな叫び声をあげる人の大部分は自覚症状のない漢字中毒症で、「××的」「××性」といった語を使いこなすことが知識人の証明であるかのような錯覚におちいつている、とも書いている。野村さんは自身の著述において、漢字は音読みする語にしか用いず、訓読みする語は必ず平仮名でかく学者である。平仮名が続いてよみにくくても、読点を用いて誤読をさけるべく努めたりしてその原則を通す一徹さである。

わたしも表記法に神経質で、日本人は柳田國男のいう「節用禍」すなわち「漢字の呪縛」から解放されねばならない、と考えている人間である。だが、自分の文章は、読み手の負担を軽くするためにかなり妥協するので、野村さんのようには一貫しないことが多い。

中毒にかかっているのは知識人だけではない。「わたしの」「雰囲気的」はいよいよ隆盛であるし、「時間的に暇がない」「期待感を表明した」などという変な表現も流行している。「漢語接辞はよほど魅力があるのだらう。だが、それを使う以上は、その「魅」が「魑魅魍魎」の「魅」であることも

知らねばならない。漢語接辞は魅力ある語であるが、危険な陥穽でもある。わたしは、そうした自戒の意味をこめてこの文章を書いた。

一昨年秋、政権をとって狂喜する民主党幹部は、基本政策の実現について盛んに述べた。九月十八日の夕方、報道陣に囲まれた立ち話で、菅直人さんが「脱官僚依存政治からの脱却」というのを耳にした。「脱官僚」の題目を唱えつづけるうちに、接辞「脱」を忘れてしまったのだらう。

(二十一年五月)